

ネパール 夢の記

第8次ネパール・ミカの会教育支援の旅

2004.03.07～03.14



夢の記

○素直に、まじめに、真剣に	齋藤 謹也
○ネパール教育支援の旅、雑感	大石 トキ
○どこでも希望を持って	和田 泰子
○どこへ向かうのネパール	松浦 陽子
○ネパールの旅を終えて	長尾 由紀枝
○夢の記	久保 愛子
○ビスタリー、ビスタリーのネパール	山下 繁憲
○変化に対応した継続	大谷 安宏

2004年3月7日から14日に実施された第8次ネパール・ミカの会教育支援の旅

夢と感動の記録

素直に、まじめに、真剣に

特定非営利活動法人ネパールミカの会

理事長 齋藤 謹也

カトマンドウのモンキー寺院（スワヤンブナー
ト寺院）には、ネパールに到着した翌朝、必ずお
参りする習慣がすっかりできてしまいました。こ
れをばくと気分が悪いのです。今回は三月八日
の朝、数名と一緒に参拝にでかけました。案内は
ゴビンダさん、サルビンダさん兄弟。ゼネスト
（バンダ）の為、宿舎ホテル・ヴァイサリからタ
クシーで行くいつもの行程を、歩いての参拝。
ゆっくり、ゆっくりと雑談しながらの歩きとな
り、またカトマンドウの朝の魅力を違う形で魅せ
てくれています。ようやく正門に着き、急な石段
を休み休み登ります。街中が静かなせいか、サル
たちも何となくゆったりした感じで迎えてくれる
ようです。おかしなもので、こちらの心がけに
よって、サルもヒトも佛塔も、参拝者の迎え方が

モンキー寺院は文殊菩薩の伝説ゆかりの地。カト
マンドウ盆地が湖から肥沃な土地に生まれ変わる
伝説が生きているように思われます。時に霧に包
まれた盆地をみる時があり、あたかも湖のような
風景が広がります。霧が晴れてカトマンドウ盆地
を一望するとき、この伝説はまったく真実である
と感じます。又、そこからヒマラヤの山々がよく
見える時などは、何度みても感激します。しか
し、どうも心がけが悪いせいか、最近の旅ではみ
えない事が続いているのが残念です。
八日午後の行事は日本大使館訪問のみという滅多
にない旅の一日となりました。交通手段が止めら
れている状況の中で、予定を変更してのんびり
とした一日。タクシーやバスのけん騒が聞こえな
いカトマンドウ市内の様子を二人乗りの自転車リ
クシャでみるのもとても視点が変わってよいもの
でありました。ただ、ゼネストの割に、市民の表
情には緊張感が全く感ぜられず、平穩の中に行な
われているように思われました。

三月九日無事にヴァイラワ空港に向かい、一路タンセンに向かいました。道路に国軍や警察の姿が目立ち、隣県をまたがるのは禁止となり、(地区間の移動規制)、ツーリスト専用車と表示のあるもののみがフリーパスとなります。そんな中でタンセンの図書、備品の寄贈先では「この状況下の中、よく来て下さいました。」という声がたくさん寄せられ、毎年のことと軽く考えての旅行者にとって、とても意味深く思えました。今回のメインの寄贈は発電機HONDA EP5000CX。

前年の中間調査の折に強い要望があり、カトマンドウのホンダの店で見かけたもので、この一台でトリヴァン大学文系校の点在する校舎の「停電対応」に大きく寄与するものであり、期待の大きさをあらためて感じました。自治会の学生達も寄贈場所の図書館にやってきて、感謝の言葉を学長、教授達と共に熱心に発言してくれていました。又、(株)リコーからの備品寄贈も喜んでくれていました。

今回、図書の寄贈も各校に多くあり、学生、教授要望による専門書の贈呈中心は、やはり大変感謝されると共に現地責任者ヌルブ・ラマ氏の苦勞がしのべれます。ありがたいことです。

翌十日は朝から五校と、図書や計測器寄贈などで忙しい半日でしたが、前日のモホン女子校と同様に、セン小学校では短い時間ではありましたがバレーボール等で子ども達と遊び、楽しい一時が過ぎました。昼はいつものナグロレストランにて関係大学教授達と昼食。わずか一日でルンビニに向かう判断となりましたが、その後すぐに道の封鎖などがあったと聞きました。よかったと思えます。

ルンビニでは十日、十一日、十二日と二泊三日。法華クラブの我々の為の大風呂などもあり、畳の部屋でゆっくりしました。ただ既援助校の壁面に、毛派の赤字の落書き。残念ですが、毛派の思惑を考慮すると修理もままならない状況の中で、この釈尊生誕地が美しくあれと祈らずにいられません。

ルンビニ公園、マヤ聖堂前にていつものように読経。もう私にとって十五回以上となる旅の恒例となった読経は、僧侶のはしぐれにしながら俗世の中にどっぷりつかって綱わたりをして毎日をおくっている者にとって実に有難い事であり、ルンビニの縁深く結ばれていることに深く深く感謝したい思いで一杯となります。

さて、ルンビニではシリ・アマリ小学校という次期建設校や、シリ・パダリヤ小学校の屋根修復依頼という形で協力依頼があり、調査しました。まだまだ、校舎建設は考えていかなければと思います。

私達の誇りはシリ・マズワニ中学校の生徒達。誇らしげに制服を着用し、男女ほぼ同数が三年間続く学校は、大変この地域では珍しく、村にとっても誇りになる教育施設として定着してきました。在籍安定、新入学生の増加などを含め、女子の就学率が高いことは特記に価すると思われま

このままもう少し（二学年分）足して高校を建設したいという思いが大変強く追ってきました。又、真面目に勉強しているシリ・グルワニ・マイ小学校の中学建設も必要かと思い、今後さらに私達の力がこの地に寄与できればと感じました。加えて、シリ・シリ・ラム小学校の中学校舎（建設済）にも認可の為の後押しは何かできないでしょうか。

ルンビニ村の寺小屋建設（日本ユネスコ各支部支援）が完成し、その立派な建物内で村長から維持運営費補助は全くないので、ミカの会で支援して欲しい旨の要請などもあり、若干戸惑いを感じました。

十二日夕刻、ルンビニからカトマンドウ空港へ。そしてナガルコットの丘に到着。「今日今日こそ」の期待むなしく「曇天」。夜のとぼりの中で「明日こそ明日こそ」と思っていたが、翌朝も「少雨」。でも、クラブヒマラヤの宿舎はあいかわらず素晴らしいです。

十三日、ナガルコット、バクタプール、カトマンドウ、パタン、ボタナートでの買物など、いつもの通りでした。パドマ・カニヤ女子校（休校）での奨学金及び図書渡しをのぞいては、特に予定がなく、ゆったり、ゆったりという感じの旅ではありませんが、帰路の飛行機の中で突然「素直に」「まじめに」「真剣に」という言葉が頭の中に浮かびました。カトマンドウ周辺をのぞいては観光地に行く事もなく、釈尊生誕の地ルンビニと山岳都市タンセンにひたすら行き、教育支援の為にかけまわる旅。まさに地元住民の願いを素直に受け、まじめに日本国内で募金活動を行い、治安状況もあまりよいとはいえない情報の中にでかけ、真剣に取り組むさまは、まさに充実の旅であり、記憶に残る旅といえると思われます。ただ、後で私達のバスの後続のバスが燃やされた話等を聞くと、やはりお釈迦様が守ってくれているという感じが深くしたところです。治安の回復を祈りたいと思います。

とにかく無事でよかった。ネパールの人達がこの状況の中でよくきてくれたと一様に喜んでくれた事が何よりでした。



ネパール教育支援の旅、雑感

大石 トキ

昨年もミカの会の皆様にお世話になりながら参加させていただき「また来年に夢をつないで」の思いを、今年も実現できましたこと、何より嬉しく思います。皆様方のお陰です。本当に有難うございました。

昨年は雨に見舞われ、世界に誇る眺望は駄目でしたが、皆様とお別れした後は天候も回復し、心行くまで山を堪能できました。今年は雨も降っていないのに、ぼんやりと霞んで本物のキラキラ輝く白い雄姿は、ぼんやりと、。サン・セット・ビューに移って、期待を持ちました。大きい夕日が地平線を茜色に染めながら、橙色に輝きを増しながら落ちていく、。でも地上すれすれの所に、またも、もやが立ちほだかり、日没のすばらしい景観はやっぱりダメでした。がっかり。空気の汚れのせい？それとも、？

ミカの会の皆様方の働きぶりにはいつも感心させられます。十校にあまる学校訪問、大小様々それも訪問校の希望を取り入れての支援用品の買出し、割り振り、その他。皆様方の大きなトランクの半分にぎっしりと詰められていました。（私だけ免除ですみません。）重い発電機や本類何百冊はラマさんの力添えで現地調達とか。何度も車の積み下ろし、全部の本にミカの会の印鑑押し、その他、計り知れないほどの時間をかけてくださったラマさんの協力のある限り、ミカの会の活動も続けられると確信いたしました。皆様方の仕事振るも手際よく精力的で、使命感あふれていました。しかも、共生の喜びをかみしめながら。

どんなプレゼントでも大きな瞳を輝かせながらニコリ微笑み、両手で大事そうに握りしめる。学生たちも労働と勉強を上手に使い分け、真剣に取り組んでいる。学生や児童の瞳に輝きとやさしさがある限り、この国に明るい未来が訪れることも確信できました。

昨年、プレゼントした、スンディ小学校は放課後で子供たちには再会できませんでした。完成して一年なのに、校舎はマオイストに掲示板がわりにされ、真っ赤なペンキで大きな字が書かれていました。報復を恐れて、しばらくはこのままとか。バイラワに向かうデコボコ道を、私たちのバスが猛スピードで走り出してびっくり。先ほどすれ違ったバスが、乗客を降ろして火をつけられたとか、。どつきり。世界中に一日も早く本当の平和が訪れることを念じるばかりです。

ここ十数年「今年も行けそう、今年も、」と一年刻みに南米やヨーロッパなどに出かけています。七二歳で初めての海外旅行がネパールのトレッキングと観光。息子が元気でしたら、ネパールはこれで終わり、ミカの会の皆さまとお会いすることもなかったでしょう。ネパール通いも九回、そのうち四回は皆さま方のお世話になりました。故息子のお陰です。いろんな転機とか、ご縁があつて人生、捨てたものではありませんね。ただただ感謝の毎日です。どんなに頑張っても歳は

とります（当たり前）。我慢しないで歳なりに生きていくことにしました。正直いって、バスの長旅はいささかこたえるようになりました。またバイラワで飛行機が大分遅れるとあつて、昼食のため町に向かつてリキシヤで出発。なるべくデコボコの少ない所を選んで走ったようですが、十分くらい我慢していましたが、どうにもならず「腰骨がくだけそう、降ろして！」と絶叫してしまいました。追いついてきた娘が、ストップをかけ、リキシヤを代えて事なきを得ました。チビの私の体がりキシヤに合わせられなかったようです。今は懐かしい旅のひとつとなりました。お手伝いは何もできませんが、これから元気で、教育支援の旅に参加したいと思っています。欲が深すぎかしら？



それでも希望を持って

和田 泰子

西ネパールのダン郡で治安部隊の乗ったバスが反政府ゲリラ・マオイストにより爆破され、三人が死亡、十九人が負傷した（二月二十二日）。

カイラリ郡の山間辺地などにある13の学校の教師合わせて四十六人が二十二日からマオイストによって連れ去られた。また別な村から7人の若者が連行された。マオイストは若者などを強制的に連行し軍事訓練に参加させていると見られている（二十四日）。ネパール東部のポジブル郡で治安部隊とマオイストの交戦があり国軍と警察に二十九人の死者、多数の負傷者が、マオ派にも少なくとも十人の死者が出た。マオ派が郡庁舎と国営銀行を襲い、通信設備を爆破しようとしたことから、激しい戦いになったとみられる（三月四日）。

出発前から、こんなニュースばかり入ってきていたので、第八次教育支援の旅は「安全を第一に、

無理をせず」ということを確認しあつての出発だった。

カトマンドウに着いた私たちを出迎えてくれたのは懐かしいラマさん、浪速の梶さんそして招かれざる客、マオイスト系女性団体による「バンダ」だった。バンダ（閉鎖、禁止）の言葉通り、店はシャッターを閉じ、車は動かず、翌日タンセンに入る日程を一日延ばさざるを得ず、早くも予定変更となった。ラマさんと携帯電話の活躍でサダルムカーム（郡庁所在地）封鎖《郡から郡への移動が出来なくなる》を切り抜け、ルンビニではすれちがったバスが焼かれ、道路封鎖になるのをすり抜け、私たちはいつものように沢山の学校をまわり、図書や発電機、学用品や布袋等を届けることができた。今回はバンダ等の影響もあって休みの学校も多かったが、次期建設予定校も詳しく視察できた。旅の詳しい内容については、どなたかが書かれると思うので、私は強く心に感じたことを書くことにした。

学校の壁にマオイストが朱書きで何か書いていることは、出発前から聞いていた。でも街道沿いの学校という学校（ミカの会で建てた学校も）に朱書きの文字が書き込まれているのには驚いた。昨年、建てたスندی小も例外でなく、雨期のドロドロになった校庭で遊ぶ子供たちのボールの跡が、点々と壁についているのは仕方ないとしても、校舎の隅から隅まで朱書きされ一年前の真っ白い校舎は見る影もなくなっていたのには、母も相当ショックを受けたようだった。村人は報復を恐れて、消すことも出来ない。マオと軍隊の板ばさみで、どちらの言うことを聞いても地獄、聞かなくても地獄という状態で、子供たちから笑顔は消え、大人も感情を表に出さなくなっている村もあるという。村を捨て都会に流れ込む人々もすごく多いという。動くことも出来ない貧しい人々に一番しわ寄せがきていることと思う。地域によってはNGOも手を引かざるをえなくなっている。ネパールはどうしてこんな風になってしまったのだろう。八年前、娘とのんびりエベレスト街道を



歩いたことが、今では夢のようだ。古い新聞等を読み返してみると、マオイストたちの活動は一九九六年二月、王政の廃止と人民共和国の確立を目指して開始された。その背景には政治が山岳地帯、農村部に届かず、ひどい貧困、農村部の慢性的失業、それに根強い差別；カースト制度等があった。マオイストは各地で警察署や銀行を襲撃して、警官や政党活動家などを殺害、お金や武器を奪うことを繰り返した。二〇〇〇年六月の王宮事件（国王はじめ王族多数が殺される）の後、話し合いにより一旦、人民戦争を停止したが、マオは四ヶ月後停戦を一方的に破り武装闘争を再開、警察だけでなく王室ネパール軍を襲撃し、双方に数百人の死者がでた。二〇〇三年九月の新聞では七年前に闘争が始まって以来、双方の死者は八千人近いと書いている。事態は良くなり、つい先日（三月二十一日）も中西部のミャグディ郡ベニで大規模な交戦がありマオ派に五〇〇人以上、国軍と警察に十八人の死者が出たという報道があった。国の指導者たちが自分たちの利害関係を超え

て、貧困等の根本解決に本気で対処しなくては、いくら武力で抑えても、マオの活動はきつとなくならないだろう。

ラマさんは言う。教育を大切にしないマオイストの活動は、本当に人々の生活を良くしようとしているとは思えない。何が目的なのか、ネパール人にさえ分からない……。子供たちからくつたくなれない笑顔と、きらきら輝く瞳が消えたら、私は何を求めてネパールに行くのだろう。こんな状態がいつまで続くのだろう。心がざわつくが、なすすべもない。

何だか暗いことばかり長々と書いてしまった。けれど今回、私たちが出逢い、一緒に遊んだ子供たちには、今までと変わらない、好奇心でいっぱいキラキラした瞳と笑顔があった。本の梱包が解かれるのを見つめる学生たちの瞳も期待と希望で輝いていた。きっとビスターリー、ビスターリーであつてもこの子供たち、若者たちが“この国に生まれてよかった”といえる国になっていくのだろう。そうなることを、心から願って。

(最後に、今年もまた、母とともにネパールを訪ねることができました。お世話になった皆様に、心から感謝いたします。)



どこへ向うのネパール

松浦 陽子

六年前はネパールについて“世界の屋根ヒマラヤのある国”と云う位の乏しい知識しか持たなかった私でした。縁あって今回の「第八次教育支援の旅」参加で五度目のネパール行きとなりました。第三次支援の旅に初参加の折、何よりも一番驚いたのは、こんな小さい国なのに、北部ヒマラヤ山岳地方と南部タライ平原とのあまりの高低差にでした。私達ミカの会の主な支援先の一つである釈迦生誕の地ルンビニはこのタライ平原に属していて、カトマンドウーポカラーダンパスの行程では、それまで登ったり、下ったり、曲がったりと少しも平坦な道がなかった様に思っていたのが徐々に広々とした平野が眼前に開けて来て、どこまでも真っ直ぐな道と夕陽が地平線上に沈んで行く光景はとても感動的でした。そして初めてネパールに降り立った印象はとにかく物珍しさ、40～50年前の戦後日本の様なカトマンドウの光

景、そして街を歩けば埃っぽさと排ガスの臭いに思わず顔をしかめながら、信号もろくに無い街の中をガタガタのオンボロ車がひしめき合っているカトマンドウの雑踏が何故か新鮮に写ったものです。支援めぐりの前にポカラからダンパスにトレッキングしたのですが、目の前にあらわれたマチャプチャレやアンナプルナ山群のあまりの素晴らしさに私たちはワアー、ワアーと歓声を上げてシャッターを押しまくりに、降りる途中眺めた段々畑が又絶景で感動、感激の連続でした。

翌年の第四次支援旅行では野生動物保護区チトワン国立公園へ行き象に乗ってゆっくりゆっくり他の野生動物を観察したり、電気の無いジャングル・ロッジで一泊し未知の体験を重ねるなど、小学生的の様に無邪気で新鮮な喜びに浸ったものです。

あれから早いもので六年の月日が流れました。そして支援の旅も回を重ねるにつれ、支援する学校が増えて来て怒濤の様な支援校廻りをしなければ

ばならなくなり、残念ながらダンパスやチトワンは旅程から外さざるを得ない状況が続いています。もともとマオイストの影響で今は山の方やチトワン地域は危険なので近づけないのですが：

今年も八人で「第八次ネパール教育支援の旅」に行って来ました。初日から「バンダ」で車も動かず店も軒並み閉まって、支援先へ移動が出来ず予定を変更せざるを得なくなりました。その分いつもの旅より少しゆっくり出来たかなと言う思いもあります。それでもその日の四時頃、全員リキシャに乗ってカトマンドウの日本大使館を訪問し、一等書記官の富田さんとお会いしてミカの会の由来など説明し、明日から訪問する予定のタンセン・ルンビニ方面の情報を得ようと理事長と事務局長が色々質問しましたが、残念ながらあまり詳しい情報は持っていないようでした。

マオイストによって地方から地方への移動が規制され翌日も最初の支援先タンセンへ行けるかどうか危ぶまれましたが頼りのラマさん情報で（ラマさんの携帯電話が大活躍でした）何とか無事に

到着し、予定の学校をほぼ廻ることが出来ました。今回は特にトリヴァン大学文系校から要請のあったホンダの発電機を差上げて喜ばれました。タンセンは、しょっちゅう停電し、大事な試験中でも度々停電があるので本当に困っていたのだそうです。メンバー八人が手分けして持って行ったテニスボール・四つ葉会の皆さんが縫ってくれた布袋・リコーさんから頂いた計測器等も各学校にそれぞれ配りました。

「ミカの会が最近来てくれなくなった」と不満を訴えていると言うセン小学校にも皆で立ち寄りしました。マオイストの影響も少なからずあるのでしょうが、子供達は屈託の無い明るい笑顔でいつもと変わらない様子が伺えて安心しました。小錦校長先生が四月十九日で退職されるとの事、あの大きな眼と大きな体を今後見られなくなるのは残念でとても淋しい事です。又、今年タンセンでの最も大きな出来事はミカの会と親交のあった、あの“ダンの親父さん”が去年十二月に亡くなっていた事です。とても悲しい事実でした。ご冥福を

お祈りいたします。タンセンに二泊の予定でしたがマオイストの規制が強化されたと云う事で急遽予定を早めて次の支援先ルンビニへと向いました。カトマンドウーバイラワータンセンと乾燥してとても埃っぽかったので緑の多いタライ平原に近づくに連れ気分まで潤って来る様で法華ホテルでは何日かぶりにゆっくりお風呂に入れてとても幸せな気分を味わいました。

ルンビニの街道沿いのスンディ小学校は去年大石さんの寄付で新築したばかりなのに何年も経ってしまったかの様に壁が汚れてしまって、皆悲しくなっていました。おまけにマオイストによつて朱書きの落書きが有り二重にシヨックを受けました。他にも街道沿いの学校はマオイストによる朱書きが目立ちました。来年は掃除用具を揃えて持つて行き、掃除の指導をする事に決めました。

次の日、三月十一日はルンビニ公園に立ち寄つた後、来年度支援候補校シリ・アマリ小学校を見に行きました。道なのか畦なのか区別がつかない

様な穴ぼこだらけのデコボコ道を私達が乗ったバスは大きく車体を傾けながらヨロヨロと走って行きました。この地域は特に貧しく、カーストの低い人々が住む村のようです。

村人2500人、子供死亡率300／1000

(5歳位までに) なんと悲しい事実でしょうか！

そして校舎が僅かに一棟有るのですが、雨漏りで使えず皆戸外で授業をする為、風の日・雨の日には授業が出来ないとの事でした。来年は新設された校舎で子供達の笑顔に逢えると嬉しいのです。その後、既支援校のシリ・マズワニ小中学校にも寄り、やはり日本から分担して持つて行つた、鉛筆や布袋等を配布、先生方にも私が勤務する九州屋さんから頂いた使用済みの制服の一部を差上げました。ラマさんによると生地がしっかりしているのでまだ充分に着られると、とても喜んでくれたようです。このシリ・マズワニ中学は支援校の中で最も成果が上がった学校で特に女子の就学率が高くなり、ミカの会としては本当に嬉しい事です。

その他マズワニ保健センターのすぐそばにユネスコによるワールドセンター（寺子屋）と云う立派な建物が出来ていて、中を見学させてもらいました。しかし、ユネスコは維持費を出してくれないので、村長よりミカの会に支援要請が出されました。

翌三月十二日はバイワラ空港に向かいがてら既支援校四校を訪問するもほとんど休校でした。最後のシリ・グルマニマイ小学校だけ生徒が校庭で整列していたのでテニスボール・鉛筆・鉛筆削り・消しゴム等を配りテニスボールで遊び交流しました。その最中、近くでバスが焼かれたとの情報で急遽バイワラ空港へ急ぎました。バスのドライバ―さんは本当に危険を感じていたらしく、私達を乗せると猛スピードで突っ走りましたので、バイワラ空港に到着の速かった事、本当にビックリでした。とにかくにも何とか無事タンセン・ルンビニの支援をほぼ予定通り終わらせカトマンドウに戻って来る事が出来ました。ほっと一安心です。

今のカトマンドウは空港はもちろん、街中、あちこちら銃を持った軍隊と警察（機動隊）が目立ちます。カトマンドウに限らずネパール全土がマオイストの台頭に依って変わってしまいました。山に登るにも入山料を取られたり、田舎の人が収穫物を売ろうと街へ出るのも禁止され、（生活出来なくなった人がカトマンドウの路上で寝ている場面もあった。）あちこちで爆破騒ぎを起こしたり、バスを焼いたりマオイストはいったい何の目的でこの様な暴挙に出るのか。私達ミカの会の現地会員であり、ガイド・通訳を引受けてくれていてネパールの情勢に詳しいラマさんでさえ、「彼らの行為は何が目的なのかわからない」、と云うのです。マオイストのリーダーと政府要人が結託して甘い汁を吸っていると云う噂もあり、ネパールは今、ゆったりと緩やかな悠久の時が流れていた数年前までの穏やかな国では無くなっています。

いったいこれからネパールは何処へ向って行くのでしょうか？今イラクを始めパレスチナとイス

ラエル・アフガン・インド・パキスタン等、数え上げたらきりが無いほど世界のあちこちで民族紛争が起こっていて、然もその殆どが宗教を火種にしているものばかりです。ネパールもヒンズー教徒の多い信仰の厚い国です。何故神を信じ、神を慕い信仰によって救いを求める人々が平和な世を作らないで、憎しみ合い争うようになってしまうのか？宗教とは人々が幸せになる為に現れたものだと思ふのに――。

私には理解できません。本当に悲しい事です。皆が信じ合い許し合える平和な世の中になって欲しいと願わずには居られません。戦争の犠牲者は何時でも弱者（女・子供・老人・病人・貧者）なのですから――。



ネパールの旅を終えて

長尾 由紀枝

最初にネパールへのお誘いがあったのは、一月中旬頃のことでした。ネパール・ミカの会の支援活動に保育園の職員が同行させていただくようになったのは昨年からのことですが、まさか自分が行けることになるとは思っていませんでした。

「海外旅行になどほとんど行ったことのない私が、本当に大丈夫だろうか……」一番の心配は、苦手な飛行機での移動でした。様々な不安・迷いと、「ネパールという国を見てみたい」という思いとで考え込んでいましたが、総園長(斎藤理事長)の「できればチャンスはやってきた時にすぐ乗ってほしい」という言葉に、今回の旅に参加する決心をしました。

現地では、ミカの会の一員として、支援している学校を訪問し、図書や精密機器の寄贈、また子どもたちとバトミントン、バレーボール、キャッ

チボールなどを楽しみ交流を持ちました。その中で感じたことは、ネパールの人は大人も子どもとても親しみやすく、知らない人でも、外国人でも、誰に対しても笑顔で挨拶をするということのすばらしさです。すれ違う人とたった一言、「ナマステ」と言葉を交わすだけでこんなにも嬉しい気持ちになれるものなのだと思います。人と人のふれ合いがとても濃い気がしました。日本ではあまり見られなくなってしまった光景のように思えます。保育園でも挨拶はとても大切なものだということを伝えているが、あれほど自然に声を掛け合えるというのはなかなかできないことです。

時間がゆっくりと流れ、穏やかで、とてもうらやましく思う反面、地域によっては暮らしに大きな差があり、驚きました。ルンビニのある村では、千人のうち三百人の子どものが五歳までに亡くなっているということでした。風邪を引けばすぐに病院に行ける今の日本では考えられないことです。衛生面、医療面でもっと何とかできないものか……。

この旅の間何ヶ所もの学校を回りましたが、それでも学校に行けない子が何百・何千人といえるのです。「教育」はやはりどの子どもにも同じように与えられるべきだと思います。

学問だけでなく、人への思いやり、どうすれば国の人々が平和に暮していけるのか……。この旅を通して、自分が保育士として何ができるのかを見つめ直し、またこの仕事の責任の重さを改めて感じました。ネパールという国を実際に自分の目で見て残念に思うのは、ネパール人同士での争いがあるということです。多くの民族がいて、様々な考え方が……。それでも国を、人々を豊にしたいという願いは同じなのだから、心を一つにして頑張つてほしいと思います。

最後に、海外に慣れない私に温かい言葉を掛けて下さったネパール・ミカの会の皆様と、現地で私たちに危険のないように、過ごしやすく配慮下さったラマ氏にお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。



夢の記

久保 愛子

今回の旅を通じて、感じた事や考えさせられた事は、言葉では言い表せないくらいたくさんありますが、実感として思い出せない：と言うと変ではありますが、そういった感覚が残ります。確かに目で見て、体感し、私の体の中に刻み込まれているのですが、うまく表現しきれないのです。こうしている時間でも、同じ時を生きているのに何故か不思議な感覚です。夢のような、または別世界の扉の向こう側へ行ったような、そんな気にさせられますが、真実には変わらないネパールでの体験は、私にとって大きなものを残してくれました。

「生きることが生活」であるということ。人として生まれて、一番単純で一番大切な事を改めて知らされました。これが私にとって一番考えさせられたことかもしれません。まだ日本の小学校一年生にも満たない女の子が、小さな赤ちゃんを抱

いて学校へ通っていたり、学校が終わると制服姿で市場のお店で働いている男の子の姿を見かけるたびに、そう思わずにはいられませんでした。家族みんなで生きていこう、という彼らの生活に感動させられました。家族の結びつきが強いということ。私達も改めて考えていかなければならないのかもしれませんが、日本の抱える虐待や不登校などといった問題は、ほとんど無いのでしょうか。生きることが第一なのですから。（と、私の目には映りました。実際はどうかというところまではもちろん分かり兼ねます。）

そんな彼らの生活を少しではありますが見る事ができて、カルチャーショックとか、かわいそうだとか、そういった気持ちではなく、その国それぞれの生活があつてそれぞれの暮らしがあるという事に気付かされました。もちろん、貧しい地区だけではなく、カトマンズ、タンセンといった町での人々の様子や、子ども達に出会うことができたことも、異国の文化に触れる事が大好きな私にとっては、大変興味深い体験であつたのです

が。

アマリ村という、とても貧しい地区の村を訪

れ、その村は近代的とは全く異なる暮らしをしているのですが、その村の青年が私にこう言いました。「この村は貧しいんだよ。」でも私には、

「それでもこの村で生きてるんだ。」と聞きました。日本でいう昔ながらの生活の中でも、きつと暖かい空間があるのかもしれないと感じさせる表情だったからです。ただ、その村の小学校には校舎が無く、外での授業が行なわれています。子ども達の学べる場所がより良くなるというなど思わずにはいられません。村の、ネパールを担う子ども達が、学ぶ楽しさをもっともっと知ることが出来たら、彼らの生活にも変化が訪れると思います。

今回の旅で、多くの学校を訪問することが出来ました。小学校から大学と、町の中から貧しい村々、バスに何時間も揺られて登った山の上の町・・・様々な学校への支援活動を行なって来ましたが、どこに行っても、子ども達が明るく学校へ行っている姿はいいものだと思います。子ども達が笑顔で学校へ行って、勉強をしたり、ボ

ールやバドミントンで遊んでいる姿は、大人にとつて一番に勇気付けられることなんだということを感じました。一緒に遊んで見せてくれる笑顔、鉛筆や巾着袋を渡した時に見せてくれる

ちよっぴり照れくさそうに笑った顔は、ずっと忘れる事はないでしょう。この子ども達に、私はどのように映っているのだろうと、不安な気持ちにもなりましたが、日本という遠い国の友達が、おみやげをいっぱい持ってきてくれたんだって、そんな風に思ってくれていたら嬉しいですね。そう信じて、また再会できる日を楽しみにしていきたいと思っています。

いずれの国においても、子ども達に関わる環境への問題は多くあります。日本でも毎日ニュースで聞かされる子どもにまつわる暗い事件には胸を痛めます。ネパールでは、子どもの生存率の低い地区の実態、働きながら学校に通う子ども達等、様々です。どの問題においても、今後改善されていくことを願わずにはいられません。子ども達の笑顔は、どの国にとつても、明るい未来をもたら

してくれるものだ、改めて感じているからです。そのために出来る事があれば、どんな小さなことでもやっていきたい、そんな風に思いました。

山々に囲まれ、古い文化を残していきながらも、少しずつ発展をしているネパールでの旅は、このように、私にとって大きな宝物になりました。臆することなく「ナマステ」と言って挨拶をしてくれる子ども達。そんな子ども達を見てふと見せた迷彩服を着た青年の顔。のんびり、ゆったりした空気が、私の気持ちまで穏やかにさせてくれました。様々な実態に、衝撃を受けたのにもかかわらず、こんなに穏やかな気持ちにもなれたのは、やはり、ネパールという国の力なのかな・・と思います。

そんな穏やかな気持ちを持ちながら、これからを過ごして生きたいと思っています。そして、是非またネパールの土を踏んで歩き、まだまだ知らないたくさんさんの顔や景色や文化に触れたいと、そう思っています。



ビスタリー ビスタリーのネパール

山下 繁憲

三月七日早朝息子に高尾駅まで送ってもらう。

長い一日の始まりだ。高尾からバスで 羽田、羽田から関空に。カトマンドウ行きのロイヤルネパールの出発時間が十四時になっている。神の国へ行くのに何と言う事だ。気ばかりあせる。いざ出発。関空から上海かなりの揺れである。カトマンドウ空港にはラマさんと梶さんが迎えにきてくれたのでホッとした。

一日目からバンダ(ゼネスト)にあい、乗物はリクシャーのみである。カトマンドウの一日は歩け、ほこりと人の波の中を牛も馬も犬もゆっくりゆっくり歩く。日本大使館に行つて驚いた。まるで宮殿のような立派な大使館だった。

次の日タンセンに。自分はタンセンが大好きな町だ。ダンの御主人は3ヶ月前に亡くなつていたので驚いた。奥さんと娘さんに泣かれてしまい、

自分もとても悲しくなりました。ミカの会の人達でせめて供養のつもりで店の品物を買つてあげた。ハンカチを奥さんと娘さんにあげるといつもの笑顔に戻ってくれたのでホッとした。

いつもながらのホテルの停電。ムードがあつて良いディナータイムだ。少々の酒ですぐに眠くなる。おそらく大いびきで同室の大谷さんに迷惑の毎日であつたろうと思う。ごめんなさい。

トリヴァン大学の図書贈呈、その他の学校訪問も終りルンビニへ。法華ホテルの大浴場、食事。

この国ではまるで別世界だ。夕方、ラマさんと久保先生と3人でタライ平原の夕日とバードウォチングに出掛けた。クウークウーと鶴の鳴き声だ。草むらで待つ事10分、鶴の方から飛んできてくれた。それも2羽。近くの池に感動の対面。仲良くよりそつてつがいの鶴だった。ホテルに帰り大浴場でほこりを洗い流して疲れをとり眠りにつく。

ルンビニ地区のどこの学校に行つても子供達が笑顔で待つて居てくれた。久保、長尾、2人の先

生は手際良くエンピツ、ケシゴムを分配し、ボール、バドミントンであそんだ。

ミカの会支援の学校の白壁にマオイストのスローガンが書かれていて悲しくなる。ほかに書くところがないのだろうか？どこの学校に行っても同じ光景である。最後のグルワニマイ小学校の近くでバスが焼かれたとの情報が入り、ラマさんも慌てている。バスで逃げる様にバイラワに向った。空港は相変わらず2時間待ちとの事。やっとの思いでカトマンドウに着く。車でナガルコットに向って出発。

クラブヒマラヤン。素敵ホテル。今日はヒマラヤの山々は残念ながら見る事ができませんでした。今までは良い天気だったのに。

今回の旅では家から持って来た梅干が大活躍だった。

家族と自分の健康そしてミカの会の会員、斎藤さん、大谷さん、ラマさんに感謝感謝。

自分の活力になるネパールにまたおとずれる日まで。



変化に対応した継続

大谷 安宏

「怒涛のとき支援の旅」に少しはのんびりとい見物やら買物の余裕を加味したスケジュールだったはずの今回支援の旅も、マオイストによるパンダの影響やおおかたの支援校を訪れた相変らずの忙しく慌しいものになってしまった。

一九九七年マホマディア小学校の雨漏り修理支援で始まったネパール教育支援も現在では、校舎修復建設支援校十校に26教室7職員室、図書支援校十校に累計3500冊余り、備品支援7ヶ所、支援候補校3、関連の出来た各校の生徒数の累計は実に10000名を超える規模に拡大し、当初からの旅行期間八日間ではタンセンの街を探索することも、ポカラを訪ねることも、カトマンズの観光までもおざなりとなり、ましてバザール用品の仕入すらもままならない状況にある。創立三周年特集の会報に「継続は力なり」と継続の重要

性を訴えたが、支援の規模拡大、現地の状況の変化、会員の構成などから「変化に対応した継続」への転換の必要性を痛感した旅であった。

会の建設した校舎のマオイストによる朱書き、保健所の焼き討ち、間近かでバスの炎上、国道での検問強化、数多くの銃を持った軍隊と警察官。行く先々で入る治安情報に追われるような移動はかつてのビスタリ、ビスタリのネパールと違い治安は確実に悪化し、全土に拡大していることが身をもつて感じられた。また、今年度のメイン事業であったコミュニケーションセンターの建設とルンビニ地区教員研修が、いろいろな事情により達成できなかったことなど、例年の支援の旅とは異なるものがあつた。そのような状況の中で何か以前の旅を思い返されることが多かった。

数年前の支援の旅では本来のボランティア活動にあわせて、ポカラでのペア湖の舟遊び、ダビツト滝、ご来光のサランコットの丘。水割りを傾けながらデッキキチャーでのアンナプルナの峰々を満喫し、ホテルのキッチンを借用し今村さんの豆

腐ねぎ入りの味噌汁つきのダンパスミニトレッキ
ング。「火渡り……さん」「なにほど……さん」が話
題をさらったチトワンのジャングル・ロッジや落
した財布を後の象が鼻で拾ってくれたエレファン
ト・サファリ。などの観光を組み込み支援活動の充
実感と共に、貴重な体験や楽しい思い出深い旅で
あり、人との関わりが持てるゆとりの旅であった
ように思う。

特にタンセンは多くの人との触れ合いがある所
だ。シリナガルホテルから街への坂道をビニール
袋を提げて登ってくる親爺と「ナマステ」と声を交
わすと、得意げに袋の中を見せて「これは俺が仕
留めた猪の肉だ」。銃を撃つ構えで「ダァーン」
と。「俺の店はそこだ。美味いから寄れ」と。葉っ
ぱを編んだ皿の塩味の焼き猪とチソ？ビアーは格
別に美味だった。それ以降この親爺を会では「ダ
ァーンの親爺」と呼び、毎年訪れているがあれ以
来猪肉はない。店に親爺の姿が見えないと道路越
しに2階に向け「ダァーン。ダァーン」と叫ぶと階
段をダダダダッと脱兎(猪突猛進か?)のごとく駆

け下りて懐かしそうに手を差伸べてくる。

タンセンでは再会を楽しみにしていた親爺だ。
昨年の支援の旅では、胃の手術をしたとシャツを
捲し上げて大きな傷跡を誇らしげに見せていた親
爺はもう居ない。3ヶ月前に他界した。持参した
青沼さんの写真に娘さんの涙、それを素知らぬ顔
で耐える奥さん。何年前だろうか、今村さんの
撮った正装した夫婦の写真は最高の記念になった
と思う。なんとも寂しい。

今村さんと街中を覚えてたの「フォト・キチ
エ・パニ・フンチャ」「フォト・フンチャ」と幼い
こども達、老人を見掛けては写真を撮りまくる。
メインストリートを進むと雑貨屋の店番をする大
柄の男に寄り添って何とも可愛らしいの女の子を
見掛けた。少し先でしきりにシャッターを切る今
村さんに「先生！こっち、こっち」。訝しそうな親
爺とはに cand ている娘に「フォト・フンチャ」「フ
ォト・フンチャ」。これが会のアイドル「塩屋の娘
ラダ」との出会いだ。



シャッターチャンスを稼ぐ為交代でしこたま仕入れた岩塩はホテルへの坂道ですごく重かった。今ではラダはすっかり娘らしくなり、弟の身長は姉を見下ろすほどに延び、親爺は自ら両手を差伸べ握手を求めてくる。母親もニコニコと迎えてくれる。ラダの高く大きな鼻は母親譲りだ。

トリヴァン大学理系校を訪ねると長身で哲学者の風貌の学長が、ゆつくりとした歩調で校庭の端まで学生達を従えて出迎え、手を合わせて挨拶をくれる。背後にはいつもマナスル、アンナプルナ、ダウラギリの峰々が眩しく輝いていた。ご子息の結婚式に自宅に招かれて花嫁を迎えに行く花婿の隊列に皆で参加、楽隊の曲に合わせのんびりと斜面の道を登ってゆく光景は平和そのものであった。その学長も今では転勤でいない。代りに小柄でいつもジャンバーのポケットに両手を突っ込んだ職人風の学長がいる。

小錦を小さくしたようなセン小学校々長との付き合いはタンセンでも一番永い。ルンビニの教員研修の提案に前向きに協力の意向を示して呉れた

教育者だ。タンセンに比べるとすべてに大きな格差のあるルンビニの教員研修が、ハード面の支援に加えソフト面の支援活動、また地域間相互協力による成果は大いに意義深いテーマであると思われる。是非、しっかりと後任に引継いで貰いたいものだ。要請されていた念願の講堂の建設は果せなかったが、この件はしっかりと引継がれそうだ。

ひろしま・祈りの石財団からの申請給付のシリ・ジャナ・ジョティー小学校は治安上の関係でルンビニ公園に近いシリ・アマリ小学校の建設に変更した。また、コミュニティセンターは上級校建設の方向で検討することとした。校舎の建設は一段落と考えていたが暫くは継続することになりそうだが、ルンビニの子供たちへのソフト面での支援のあり方を検討する時期にきていると思う。また、治安の状況によっては安全を優先し支援の活動を一時的に見合すことも考慮する必要があるのではないだろうか。旅行期間の延長と合わせ、当たり前のように遅れる航空会社から南回り

ルートの検討も必要でないか？
「変化に対応した継続に変えなくては、変らなくては」



ネパール・ミカの会



ネパール夢の記 第8号

ネパール・ミカの会教育支援の旅

発行日：2004年5月15日

発行所：東京都町田市忠生2-5-36こもれび堂内
NPO法人ネパール・ミカの会

電 話：042-797-3675

タイトル・カット：秦 明広・太谷 安宏